

祖父の愛情

福井県立盲学校専攻科理療科

加地 理沙

「ただいま。」家に帰ってきて、玄関のドアを開け、靴を脱ぐ。「おかえり。」玄関から続く廊下の向うの方から、祖父が微笑みながら歩いてくる。「え、おじいちゃん…。」私は小さな叫び声をあげたが、すぐに「ただいま。」と言い直した。なんとなくの成り行きで、祖父とリビングのテーブルの向いの席に座った。祖父は背もたれに対し、横向きに椅子に座って顔だけこちらを向いている。祖父は食事をするとき以外は、そんな風に座ることが多い。

「おじいちゃん、どうやって帰ってきたの？」私の問いかけに祖父は少し困ったような顔をしてから、「気がついたらその大通りにおったんじや。そのまま家まで歩いて帰ってきた。」と言った。「ふーん。」私はそれ以上聞いてはいけないような気がして、この話題を終わらせた。それから祖父は今までに何回か聞いたことがあるような祖父が子どもの頃の話や、祖父が好きだった畑作業の話をしてくれた。その時だ。「リリリリッ、リリリリッ。」突然耳元で大きな音となり、祖父の姿が消え真つ暗になった。目を開けると自分の部屋の天井が見えた。「なんだ夢か。」携帯のアラームを止め、学校に行く支度を始めた。

二年前、私が高校を卒業した年の十月、祖父は亡くなった。それから祖父は時々、私たちの夢に出てくる。物置から突然現れたり、家に帰ってきて洗濯を始めたりの夢だ。心配で様子を見にくるのか、それとも手抜き洗濯やお風呂掃除が気にくわないのか。洗濯とごみ出しとお風呂掃除。それが祖父の仕事だった。祖父は入院する前日まで、最後に家にいた日までこの仕事をかかすことはなかった。

祖父が入院していたのは三カ月だった。その三カ月の間は長いような気がしたが、終わってみるとあつという間だった。入院中も祖父は家のことを気にかけて、私たち孫を可愛がってくれた。お見舞いに行くと、祖父は私たちを喜ばせるためにお小遣いをくれた。そして、私たちは祖父を喜ばせるために、お小遣いをもらって嬉しいという以上に喜んでみせるのだ。思いやりに思いやりが重なり、こんなに切ない感情になるのかと胸が苦しくなった。

私は視覚障害がある。そのため、祖父の付き添いに行っても、点滴や心電図の機械をしている祖父の看病を思うようにできなかった。線を見落としてひっかかってしまうと危ないからだ。いとこは看護師や介護士をしていて、上手に祖父の看病をする。まだ幼い妹や弟は、当時はやっていたお笑い芸人の真似をしてみせて、祖父を笑顔にする。何もできないのは私だけだった。それが愛情を注いで育ててくれた祖父に対して、申し訳なくて、情

けなかった。

ある時、祖父が背中が痛いと言った。寝たきりで、背中や腰が辛かったのだと思う。私は高校を卒業して、盲学校の按摩、鍼、灸を習う課程に進学していた。そこで、母に線がひつかからないように見てもらいながら、私は祖父に習いたての按摩をした。「気持ちいいのう、やっぱり按摩師の手やのう。」「そう？」「何気なく応えながら、内心は嬉しくて仕方がなかった。祖父のために自分にもできることがあったと胸がいっぱいになり、祖父の背中がぼやけて見えた。「ああ、気持ちいい。」その本当に気持ちよさそうな祖父の言葉にこらえきれず、一滴の涙が頬をつたった。

この頃の私は、自分に按摩師が向いているのか、この道を選んでよかったのかと悩んでいた。しかしこの時、祖父に喜んでもらえたことがただ嬉しかった。それだけでこの道を選んで本当によかったと思った。祖父は私に目が不自由でもできることが、自分にしかできないことがあると気付かせてくれたのだ。

朝晩が肌寒くなり、秋が近づき始めた頃、祖父は静かにこの世を去った。それから二年経ち、私は二十歳になった。自由が与えられると同時に、責任が課せられ、将来になんとなく不安を感じる。なんの変哲もなく過ぎていく毎日に嫌気すら感じ、これでいいのかと自分を責めたりする。そんな時に、いつも自分を受け止めてくれて、愛情を注いでくれる人がいると、どれほど心強く、幸せなことだろうか。祖父は私たち孫に惜しみない愛情を注いでくれ、私たちの心の中に生き続けるのだ。私にはまだ分からない親心。しかし、いづれ私も子供をもち、孫をもつことになるだろう。その時、祖父にもらった愛情の分、愛情を注ぎたいと思う。それが人の営みなのかもしれない。祖父が心配で、夢で会いにきてしまうくらい頼りない孫かもしれない。しかし、祖父の孫らしく自信をもって、私なりに私なりの決して特別ではない人生を、精一杯生きていこうと思う。天国でいつも応援してくれて、見守っていてくれるおじいちゃんがいってくれるから。